

◆ はじめに ◆

「COPD急性増悪は筋肉の問題である」

「CO₂ナルコーシスの原因は肺血流にある」

「水深1 m以上では水遁の術はできない」

こんなことを聞くとどう思いますか？

「え、そうなの？」「そんなはずないでしょ！」「水遁の術って何？」などいろいろなコメントがありそうですが、これらはすべて呼吸生理学的に説明できるのです。

呼吸生理と聞いて何を思い浮かべますか？ 学生時代に聞いた無味乾燥な（失礼！）講義でしょうか、それとも3回くらい開いたあと本棚でほこりをかぶっている呼吸生理の教科書でしょうか。「結局、呼吸生理ってイマイチ臨床の役に立つのかわからないんだよね」と思っている方もいるのではないのでしょうか？

本書は、そのように呼吸生理とはちょっと距離をおいて生きてきた方にこそ読んでもらいたい本です。呼吸生理を知ること、今まで何となく見過ごしてきた呼吸の症状や徴候の意味がわかるようになればしめたものです。より深く理解できるようになることで、自信をもって呼吸器疾患のある患者さんを診療できるはずです。

「人工呼吸に活かす！」というタイトルがついている通り、本書は人工呼吸器に関する内容に多くのページを割いています。人工呼吸器というと、なんとなく器械の取り扱いを中心に考えて、患者さんは二の次みたいになることがあります。ここでもやはり重要なのは患者さんの呼吸生理です。そもそもなぜ人工呼吸器が必要なのか、どのように設定すればより効果的にかつ安全に呼吸を助けられるのかを理解することで、単

に血液ガスの結果の数値あわせをするような人工呼吸管理から卒業できるはずですよ。

本書では、呼吸生理の考えかたを身につけるのを目的にしているのですが、薬剤投与量などの情報はあえて省いていますが、その代わり臨床に直結する呼吸生理についてはできるだけ詳しく説明しています。中枢神経や末梢神経、筋肉、骨格、気道、血液、肺胞といったさまざまな要素が、美しく連携して機能する呼吸生理の世界にどっぷり浸かって、「呼吸がわかる」楽しさを堪能してください。

2013年3月 ICU当直中の院内にて

田中竜馬